

川端康成「虹いくたび」論

―作品内のジェンダー・バイアス―

潮崎 文香

―はじめに

「虹いくたび」は昭和二五年三月から昭和二六年四月にかけて雑誌『婦人生活』に掲載された小説である。小説内の時代設定は終戦後であり、小説が発表された当時の時代を投影したものと考えることができる。ある家族の関係性を描いた「虹いくたび」は、終戦を迎え、変わりゆく日本の中でどのように登場人物たちを写し出したのだろうか。

これまでの先行研究において「虹いくたび」は「母性」や「母という存在」というキーワードをもつて近藤裕子氏^(注一)や脇島行江氏^(注二)によつて研究が行われている。「母性」や「母という存在」は川端作品においてたびたび取り上げられるテーマであり「虹いくたび」の中にも

見られる要素である。

本稿では従来の研究成果を鑑みながら、先行研究では行われていない社会的な分析を行う。発表当時の日本における家族制度と、小説内の家族関係を比べ、どのような家族関係が描かれているかを明らかにする。そして家庭内や当時の男女間に見られるジェンダーについて考えていきたい。作品内の社会的性差の偏り、ジェンダー・バイアスについて深く考察する。ジェンダー・バイアスとは、教育内容が男女によって異なっていたことや子育ての問題など、歴史的に性別を理由に男女で格差があることを示す。「虹いくたび」の作品内においては男女の性に対する隔たりを見て取ることができる。その男女の性に対する隔たりを本稿ではジェンダー・バイアスとして捉え、どのように登場人物に影響を与え、作品の評価

に関わるのかを検討したい。

II 研究

第一章 家族関係

「虹いくたび」は昭和二五年から二六年にかけて発表された小説である。終戦を迎えたことで日本は政治面、経済面において転換期を迎えることとなった。また民法改正によって社会の規範も変わり始めた。そんな変化していく時代の中で描かれた「虹いくたび」はどのような小説なのだろうか。第一章では「虹いくたび」における家族関係の考察を行う。家父長制がどのようなものであるかを確認し、水原家がどのような家族なのかを確認していく。

上野千鶴子氏は、戦後の日本の家父長制について『家父長制と資本制』^(注三)の中で、「自然」と「市場」、「市場」と「家族」が論理的にパラレルな関係にあることを指摘している。上野氏は「労働市場」において意味のある人は、「健康で一人前の成人男子のことだけ」であり、「女・子供・老人」は「家族」の中に取り残されているという。「家族」の中に取り残された者たちは「成人男子」に経済的に依存するしかない。そのような社会が家父長制の権威

を保つ一因である。

作中では百子も、麻子も仕事を持っていることを示す記述はない。水原の扶養に入っている点においては、家父長の権威の下にあったといえるだろう。

また日本では明治民法によって家長の権限を保証しており、家長の権限はより強固なものとなっていた。明治三年に施行された明治民法では家長の権限を次のように保障していた。

第七五〇条 家族が婚姻又は養子縁組を為すには戸主

の同意を得ることを要す

第八〇一条 夫は妻の財産を管理す

第八一三条 夫婦の一方は左の場合に限り離婚の訴えを提起することを得

(中略)

ニ 妻が姦通を為したるとき

(後略)

第八七七条 子は其家に在る父の親権に服す但独立の生計を立つる成年者は此限に在らず^(注四)

明治民法下では、家庭の中のさまざまな決定権を家長である男性が持ち、原則として女性 は家庭内のいかなる権利も持たなかった。夫や義父母に尽くし、次代を担う

子供を育てる、良妻賢母であることを求められたのである。

このような明治民法を規範とした家族制度を大きく変えるのが、昭和二三年の民法改正であった。日本の家父長制を正当化していた明治民法が改正され、どのような社会規範の変化がもたらされたのだろうか。まず民法がどのように変化したのか確認しよう。

第七七〇条 夫婦の一方は、左の場合に限り、離婚の

訴えを提起することができる。

一 配偶者に不貞な行為があつたとき。

(後略)

第八一八条 成年に達しない子は、父母の親権に服する。^(注五)

明治民法第七五〇条、第八〇一条のような規定は改正された民法には見られない。加えて男性優位といえる明治民法第八一三条、第八七七条は男女が平等な扱いに変化していることがわかる。民法上は確かに男性優位から、男女平等へと変わったように見受けられ、その変化を青井和夫氏^(注六)は次のようにまとめている。

①「家」や「戸主」に関する規定や、②妻の無能力

規定も廃止され、③妻の不貞のみならず夫の不貞も離婚原因となり、④成年の子は自分の意思だけで結婚でき、⑤扶養義務者の順位はなくなつて直系血族と兄弟姉妹間で相互に協力して当たり、⑥配偶者はつねに相続権をもち、子は男女とも均分を原則とする、といった新しい家族生活のモラルが法的に確立されたわけである。

このように昭和二五年前後の日本の家族制度は明治民法に規定された父権的な家族から、家父長制が廃止され、夫婦が平等となるなど大きく変化をもたらしたと思われる。しかしその実情を青井氏は「だが、法律が変わり、新しいモラルが学校教育・社会教育・マスコミを通じて教化されても、生活の実態はなかなか変わるものではない。それを可能にする経済的基盤が整っていなかったからである。」と述べている。

これらのことを「虹いくたび」の家族関係と照らし合わせると、父である水原は建築士であり、経済的基盤は整っていると考えられる。水原家は水原、百子、麻子という三人からなる家庭で、水原は父権を誇示せず、娘たちの行動を縛ることも、口出しすることもない。よって水原は民法改正によって打ち出された父親像と齟齬をなさない人物として描かれているといえる。ただし水原に

は、かつて菊枝という愛人がいた。その菊枝との間にも子供がおり、水原の女性関係は、民法や社会の規範にふさわしいものとは言えない。そんな女性に対する水原の態度は、この小説内で他の登場人物を苦しめる要因となっており、看過することはできない。百子と水原の関係性を考えると、水原が百子の「火遊び」を咎めないのは水原自身の女性関係に基づいているのかもしれない。それは恋愛と結婚は必ずしも結びつくものではないからである。百子の恋愛も、相手が百子より年下の少年ばかりで「同性愛の変形」という結婚に至らない関係であった。それゆえに水原は娘の自由な恋愛を許していたとも考えられるのではないか。

より詳しい百子の恋愛の考察は第二章で行うが、百子の少年たちとの関係は純粹な男女の恋愛関係ではなく、百子が「男性的な優越感」を得るための関係性である。それゆえに百子は竹宮少年との関係について、「この少年も男になってゆく前に、別れなければならないのだろうか。今箱根に来たのが、百子の終りのつもりだった。」と関係が終わることを見据えていた。水原は百子の少年たちとの関係を「火遊び」と語り、その関係性は一過性のもので、決して結婚という家族形成に影響がある関係ではないことを見抜き、口を出さなかったと考えられる。水原家の家族関係についてまとめると、水原は娘たち

の恋愛や行動を縛らず、水原家は前時代的な家父長の支配による家族関係ではないことが分かる。当時の日本が戦前までの家族制度から脱し切れていない中、時代の流れに先んじて家父長による支配的な家族制度から脱しようとしており、個人の行動をそれぞれが決められる、新しい家族の在り方を形作っている。このことは、「虹いくたび」の小説内における大きな要素である。

第二章 「虹いくたび」に見られるジェンダー

①百子と啓太

第一章では、水原家の家族関係を考察してきた。明治民法によって規定された家族関係とは異なり、改正民法で打ち出された家族関係に近い、新しい家族関係を築いていることを確認した。では、水原家の家族関係はジェンダーに関する問題とどのように関わるのだろうか。

第二章では、まず百子と恋人たちとの関係を確認しながら、作品内で男女の関係がどのように描かれているかを、考察するところから始めたい。

この節では百子の視点から啓太との関係を考察する。百子にとって啓太との関係を男女の恋愛感情による結びつきである。百子は、啓太が自らと関係を持つとしな

いのは、百子の純潔を尊んでいるからだと思い、啓太が百子と会う前に娼婦とたわむれてくるのは自らの欲望を百子に向けたいためだと考えている。しかし百子は、百子の純潔を守るための啓太の行動の中に、疑念や嫉妬を抱く。特攻隊員である啓太が、娼婦から「必死の奉公」を受けること、農家の娘たちに身をささげられることは、国のために死んでいく男性に対する女性たちからの精一杯の奉仕なのだろう。そしてそのような待遇を受けることは、啓太に自らに死が近づいていることを意識させる。百子は、啓太が他の女性との関係を語ることに、啓太の「明日にも死に行くかもしれない、航空兵」としての「悩みと苦しみとを読み取」り、「啓太をゆるすよりほかに」ない。

そして百子は、自らの体を啓太に捧げることを「惜しんではない」。ただ、求める相手が百子自身でないことが、百子には解せないのである。百子は啓太と関係を持つことに躊躇いがない。それにも関わらず啓太は他の女性と関係を持ち、その話を百子に聞かせることで「啓太は百子の純潔を、自分の放縦の弁解の種にし、自己に瞞着しているのではなからうか。」という疑念を百子に抱かせる。

そして百子と関係を持った後、啓太が百子に「「ああ、つまらない。しまった。」」「「なんだ。だめなひとだよ、

あんたは……。」と言ったことで、百子が啓太に抱いていた疑念こそが正しいものだったと百子は感じる。百子は啓太と関係を持ったことに喜びを感じていたからこそ、その直後に啓太が百子を否定したことは、ただいたずらに百子の純潔をもてあそんだと百子に強く印象付ける。「男をもてあそんだ女なんて、この世の中に一人もないいわよ。私はよく知っているわ。よく知っているわよ。」という言葉には、自らの純潔をもてあそんだ啓太に対する百子の憤慨がにじんでいる。

②啓太が求める「母」

次に啓太から見た二人の関係を考えていく。啓太は百子と男女の関係を持つとはせず、百子と会う前に娼婦とたわむれてから百子と会っていた。それはどのような意味を持つのか。

近藤裕子氏は論文において「母のない啓太にとって百子が〈母性〉として捉えられて」おり、「啓太の「しまった。」という嘆きと後悔は、幻想としての〈母性〉の崩壊と、実在する肉体としての〈女〉への失望とから発せられたものと解釈できる。」と述べている。また啓太が百子の乳碗を作ったことについては「百子の〈乳房〉の型をとって、その乳碗で最後の水盃を飲みたいという啓太の願い

は、〈母性〉を飲みほして〈母〉と共に死ぬ——母胎回歸による、人為的な死の克服——を意味している。」と述べている。つまり啓太が百子との関係で得たかったものは、戦死した自らが母体回歸し、転生することで死から逃れられるという心の安定なのだ。啓太が百子と関係を持つとうとしなかったのは、「母」という存在と関係を持つ禁忌を避けることが目的であり、百子の純潔を守ろうとしていたわけではない。

百子と啓太との関係に、啓太の「母」を求める感情が介入するとき、「母」はどのようなものとして捉えることができるのだろうか。他の川端作品を参考に考えたい。ここでは『新潮』に昭和三五年一月号から昭和三六年一月号まで掲載された「眠れる美女」の江口老人と眠ったまま添い寝する少女たちの関係から川端作品における「母」とはどのようなものか見ていく^(注七)。ここで「眠れる美女」の江口老人と啓太を比較するのは、二人の「母」を求める感情に共通性が見られるからである。両者はともに恐れを抱いている。江口は古い、啓太は死、その恐怖を「母」という存在を得ることで克服しようとしている。

男性としての機能を失った「安心できるお客様」しか訪れることのできないはずの宿を江口は利用し、色黒の娘と添い寝した際、「ゆるしてもらうかな。自分の最後

の女として……。」と劣情を抱く。しかし、そのような考えが頭をよぎったことを悔いていると、ふと、自らの最初の女は誰であったかを考え始め、それは母であったと思に至る。このとき、江口の母と少女を結び付けているのが両者の乳房である。

老人は自分のたなごころのしたにある二つのちぶさはなんだろうと思った。自分が死んだあとにも温い血をかよわせて生きていくものだ。しかしそれがなんだろう。老人の手にだるい力がはいってつかんだ。娘たちは乳房も深く眠らせられていてこたえてこない。江口が母のいまわに胸をなでた時ももちろん母の衰えた乳房にふれた。乳房とも感じなかったものだ。今からは思い出せない。思い出せるのは、若い母の乳房をまさぐって眠った幼い日である。

江口にとって、老いた母の衰えた乳房はもはや乳房ではなく、娘たちや若い母の生命力に満ちたものだけが乳房だと感じられる。それは母の乳房は赤ん坊を養育するものであることに起因しているのだろう。そして色黒の娘に劣情を抱いた後で、自らの最初の女は母であると思に至る点は「性」が「生」へと転換することを示す。男女間に生まれた性衝動が性行為へ発展し、性行為の果て

に子供ができる。性衝動を抱いた女性に母性を感じることはこうしたプロセスを考えれば不思議ではない。乳房という媒介を通して、色黒の娘と江口の母は、江口にとつてごく近い存在になるのであろう。この「性」が「生」へと転換される場面は「虹いくたび」にもみられる。

百子の首を抱えていた、啓太の腕の指先が、百子の肩からそつと胸へ来て、乳房に触れた。

「いや、いやよ。」

百子は胸をすくめて、両手で乳房をおさえた。

「ああ、お母さん。」

と、啓太は言った。

(中略)

「不思議だなあ。」

啓太は百子の胸に額を寄せた。

「お母さん、と僕は今言いましたね。ほんとうにそう思ったんです。お母さんに会って安心して死に行けそうな気持です。」

このように啓太も百子の乳房に触れることで母を思い出している。乳房は「性」的なものから「母」を想起させる「生」的なものへと変化する。江口が若い娘の乳房に触れて若い母を思い出すように、啓太は百子の乳房に

触れ、母を呼び、「安心して死に行けそう」と感じる。人は誰でも「母」から生まれ、「母」は「生」に最も近い存在である。そしてその「母」を最も感じられる身体の部位として乳房が語られていることがこの二作品から読み取ることができる。

乳房が「母」を最も感じられる身体の部位であり、啓太が百子に頼んで乳腕を作り、終には戦地にまで携えていったことはやはり死の直前にまで「母」に触れ安心して死にたいからなのである。

二人が互いに求めたものは、純粋な男女の恋愛関係と「母」であり、差異が生じている。百子は啓太が自分に「母」を求めていることに気がついておらず、二人が求めたものの違いが百子を傷つけている。啓太が百子に取らせた乳腕は、百子にとっては啓太からの辱めの特徴となり、「その石膏をこわしてちょうだい。」百子は羞恥と憤怒とが燃え上がって来て、叫ぶように言った。」と啓太に否定を受けたその場で壊そうとする。しかし啓太はそれを拒み、銀の乳腕を完成させ、戦地へ携えて行っている。この乳腕に対する二人の反応は、恋愛感情と「母」を求める気持ちでつながっている二人の奇妙な関係性を色濃く表している。

③「処女であること」に対する価値観

また二人の関係から百子が自らの処女性についてどのように考えていたのか確認したい。当時の男女交際において、女性の婚前交渉は避けるべきものとして考えられていた。家父長制度の中では、血統・家系が重視されており、未婚女性の処女性は重要視されるものであった。また江戸時代以降の女性教育に大きな影響を与えている貝原益軒の「女大学」として知られる「女子に教ゆる法」(注九)の中では女性の処女性、貞操観念を次のように述べている。

たわれたる行ないあれば、一生の身をいたずらに捨て、名をけがし、父母・兄弟にはじをあたえ、見きく人につまはじきをせられん事こそ、口おしくあさましきわざなれ。(中略)女は心ひとつを貞しく潔くして、いかなる変にあいて、たといいのちを失うとも、節義をかたく守るこそ、此の生、後の世までの面目ならめ。つねに心づかいをして、身をまもる事、かたきにすぎたらんほどは、よかるべし。人にむかい、やわらかに戯れわみて軽かなるは、必ず節義をうしない、あやまちの出でくる基いなり。

このようにみだらな行いを非難し、女性に貞操を守ることを求めている。女性の処女性や貞操観念は、かたく守られてこそ良いとされ、「女子に教ゆる法」の中では、命を失ったとしても貞操は守らなければならないものとして述べられている。

また戦争中に発行された河盛好藏の『新訳女大学』(注九)にも、「青年子女が貞操を堅固にし、その純潔を保つことは、将来の日本のために、ゆるがせにすることはできない大切な事であるように思われる。」という記述があり、純潔は守らなければならないものという認識に変化はない。

しかし百子は、女性たちに求められていた貞操観念や処女性を重視しておらず、恋人と肉体関係を持つことに躊躇いがない。男性には許されていた婚前交渉が、女性には許されないという性のダブル・スタンダードが当時の日本の価値観には残っており、そこそがジェンダー・バイアスである。百子は当時の女性たちに押し付けられていた社会的な女性としての価値付けを打ち壊す人物といえるのではないか。

この小説内における性のダブル・スタンダードから起こる男女の貞操に対する価値観の違いは、啓太と百子の関係に現れている。啓太の娼婦とのたわむれは一般的に咎められない行為だが、百子にとっては、百子の純潔を

尊んでいるのだと思うと同時に嫉妬を抱かせるものである。少なくとも娼婦に求めるくらいならば、なぜ自らに求めないのだろうかと考えるほどに啓太と関係を持つことを望んでいる。

一方で啓太は娼婦たちとも関係を持ちながら百子に「母」を求める。それは百子が処女だからである。家父長制の中では血脈は重要視され、他の男性とも肉体関係を持つ娼婦は、家父長制において求められる「母」として不適である。処女である百子ならば家父長制の枠組みの中でも「母」になることができる。啓太も性のダブルスタンダードを当然視し、②で明らかにした二人がお互いに求めたものの違い、恋愛感情と「母」という差異にもジェンダー・バイアスが関わっていることが分かる。

百子の性に対する考え方は、婚前交渉は避けるべきという当時の価値観とずれていることが明らかになった。そして啓太と別れてからも幾人かの少年たちと関係を持つていることが小説内で示されていることから、女性が多く男性と肉体関係を持つことを良しとしない女性に対する価値観との違いを読み取れる。(注一〇)だが百子は啓太と肉体関係を持った際、女性としての自らを否定され、激しい怒りと羞恥を抱いていた。それにも関わらず、なぜ百子は、少年たちと関係を持つとうとするのか。

④男女間の性に対する隔たり

啓太によって傷つけられた百子が少年たちと関係を持つとうとするのは、百子が男女間の性に対する隔たりを感じていることに原因がある。百子が男女間の隔たりを感じたのは、自らの経験だけでなく、父母の関係からも男女間の隔たりを感じている。百子が自らの経験と父母の関係から感じた男女間の隔たりは、百子に女性は男性に従属させられているという思いを抱かせたのではない。百子自身は啓太との関係で、女性として否定され、啓太にもてあそばれたのだと考えている。百子の母は百子を身ごもったが、水原と結婚することは叶わず、自殺した。女性は男性に振り回され、傷心する。このことが女性に男性に主体性を奪われ、男性の言動に縛られるという、従属関係が男女間にあると百子に感じさせた。この男女間の従属関係というものが百子にどのような影響を与えているのか、脇島江氏が述べている啓太に否定された百子の少年たちとの関係を参考に考えたい。

啓太から《性の否定》を受けた百子の逃げたところは少年との関係であった。相手が少年ならば、〈自分が男性的な優越感をおぼえ、〉〈年下の少女に対する同性愛であるかのような錯覚〉を起こすという〈同

性愛の変形」でもあった。実際、すみ子の日記にもあるように、百子は学生時代に同性愛があり、またこれは少年自身にも認められ、お互い〈正常な男女の愛〉を求めつつも、それができないところでの関係である。

「正常な男女の愛」を築くことができない百子が少年との関係のなかで得ている「男性的な優越感」とはどのようなものなのだろうか。百子は少年たちを完全な男性として捉えておらず、まだ男性として成熟していない少年との関係の中であれば、百子が「男性的な優越感」を得ることができる。それは百子と啓太の関係で生まれた従属関係を、百子と少年との年齢や経験の差で反転しようとしているのだろう。つまり百子が少年との関係で得ている「男性的な優越感」とは、百子が抱いている男女の従属関係の逆転である。それゆえに、竹宮少年の子供を妊娠したことは「少年を上から見下ろしつづけていた百子は、子供を宿したことで、たちまち位置が顛倒して、少年の下に見おろされたかのように」という、百子が得ていた「男性的な優越感」はまやかしであったことを明らかにし、再び男性の従属下に戻ってしまう出来事となる。百子より幼く、男性として未熟な少年との関係で、その従属関係を壊そうと試みたが、百子は妊娠してしまう。

百子の母がそうであったように、百子自身も「憎むべき男のわがまま勝手」に振り回され、男性の従属下から逃れられないことを突きつけられた。

⑤百子の妊娠・堕胎が持つ意味

百子にとって婚姻関係のない状態での妊娠は、女性ばかりが苦勞するもの、「憎むべき男のわがまま勝手」という言葉で表されている。婚姻関係のない男女の間にできた子供にとって、親になるのは母である女性だけであり、負担を負うのは女性ばかりである。

しかし、妊娠という出来事は百子にとって異なる意味を持つものに変化していく。「百子はわが子の父として竹宮を考えられないので、聖母マリアの受胎のように自分ひとりで授かった奇蹟の子とも感じられた。」という部分に注目したい。聖母マリアの懐妊は男女の交わりなしに行われたものであり、そこに生身の男性による支配はないと考えられる。そのことは百子にとって、男性の従属下からの解放となりえるものだったのではないか。婚姻関係のない男女間の妊娠は女性にだけ負担がかかる。それは子供を産み育てたとしても、また子供を産まず堕胎するとしても心身共に傷つくのは女性である。この負担の不平等をなくすには、始めから、男性が存在し

なければ、不平等は起こらず、女性が男性の従属下にあるという構図も壊れるのである。

では、この小説においてその構図は壊れたのだろうか。百子は子供を生むつもりであったが、結局、子供は水原や青木の計らいによって墮胎することになってしまふ。百子は男性の干渉を受けない子供を妊娠し、産み、育てることで男性の従属下から解放されることを望んだが、成し遂げることはできなかった。それはなぜだろうか。子供の問題について考えるとき、再び家父長制の問題に立ち戻る必要があるだろう。

家父長制の中で子供とはどのような存在として考えられるのか、上野氏は次のように説明している。

異性愛 heterosexuality の制度が二つに分けた性別 gender のうち、「男」性との関係で「女」性はまず第一義的に「産む性」＝再生産者として定義される。女性が被抑圧者であるには、女性がたんに再生産者であるからではなく、自分自身で行なう再生産とその結果である子供という再生産物 reproduces — 生産物という用語に対応させて再生産物という言葉を用いよう——から疎外されているからである。女性の再生産労働の成果である再生産物は、男性＝家父長 patriarch によって領有されている。それが「家

父長制」の意味である。

百子は婚姻を結ばないまま妊娠し、その子供を産もうとしている。家父長制の下では生まれた子供が「男性＝家父長に領有され」ということをこの小説に即して考えると、子供の父親である竹宮は百子と婚姻関係を結んでおらず、あまつさえ自殺している。したがって生まれてくる子供の親権を持つのは水原だ。水原が子供の出生について権限を持つことは、家父長制の影響力がこの家族の中に残っていることを示している。つまり最終的に百子の妊娠、墮胎によって示されるのは、男性の従属化からの解放ではなく、家父長制から脱し切れない家族制度なのだ。

この小説は終戦後の変わり行く日本の家族を描いた作品である。昭和二三年の民法改正によって、家父長制は廃止され新しい家族制度が示されたが、現実世界の家族関係はまだ、家父長制から脱し切れていなかった。その中で「虹いくたび」は時代の流れに先んじて家父長による支配的な家族制度から脱している新しい家族の在り方を示している。それは父が家族の行動を決めるのではなく、百子も麻子も自分の意思で行動している点である。しかし、百子が水原と青木の決断によって墮胎するという点においては、家父長制から脱却できていない家族関

係を表している。百子個人の意思は尊重されず、家父長である水原が子供の出生を決めてしまう点において、家父長としての権限が家族を支配していることは明らかである。水原家は個人の自由を認めようとする戦後の新しい家族像であるが、その家族の中にはまだ家父長制の支配も残っている。水原家には家父長制からの脱却と温存の両面が見られる。

「虹いくたび」は家父長制ではない家族の在り方を示そうとし、自由な女性の姿を描いている。民法が改正され、社会が変化している中で、女性にまつわる価値観や、規範の変化しようとしている様子がうかがえる。しかしその変化は旧来通りの価値観や規範の中で、抑制されてしまう。この小説はそんな一連の変化、抑制を描くことで、当時の読者たちに前時代的な社会の在り方を改めて問う作品となっているのではないだろうか。

III まとめ

「虹いくたび」はこれまで、啓太の「母なる存在」を求める心や、百子自身の「母」を求める感情を分析する研究がなされており、それは幼いころに肉親を失った川端自身と重なることから川端文学に見られるテーマのものの一つとしてこの作品も考えられて来た。

本稿ではこれまでの「母」という存在を通じた作品研究ではなく、作品の人間関係に注目し、作品内に潜むジェンダー・バイアスを読み取ることを目的に分析を進めてきた。啓太に傷つけられた百子は、自らより幼い少年と関係を持ち、その中で「男性的な優越感」を得ることで、百子を感じていた男女の従属関係を覆そうとした。そして、①妊娠から堕胎までの一連の流れには、女性は男性の従属下から逃れられないことを百子に思わせる、②しかし百子の妊娠を男性の支配がないものと考ええることで女性を自由にする、③子供を産むことを決意した百子が父親たちの図らいによって堕胎するという三つの段階を経て、最終的には家父長制から脱し切れていない家族関係を示している。この小説の中では家父長制から完全に抜け出すことができなかった。しかし娘の行動の自由がある程度許し、認める父親を描くなど、民法改正以前の家族制度の正当性を問いかける作品になっているのではないだろうか。その問いかけが当時の女性たちにどのよう受け取られたのかを知るために初出雑誌『婦人生活』の調査を引き続き行っていきたい。

IV 注・参考文献

【注】

- (注一) 近藤裕子「虹いくたび」の構造——円環と断絶——(川端康成文学研究会『川端康成研究叢書8』哀歌の雅歌『教育出版センター』昭和五五年一月)
- (注二) 脇島行江「川端康成『虹いくたび』論」(『作新国文』平成五年七月)
- (注三) 上野千鶴子「家父長制と資本制」(岩波書店 平成二年一〇月)
- (注四) 大蔵省印刷局「官報」(明治三二年六月二二日)
- (注五) 大蔵省印刷局「官報」(昭和三二年二月二二日)
- (注六) 青井和夫「第四章 戦後における家族観の変容 一節 戦後日本の家族観の変遷」(青山道夫他編『家族観の系譜 総索引』講座家族八巻 弘文堂 昭和四九年九月)
- (注七) 「虹いくたび」と「眠れる美女」には婦人雑誌と文芸誌という発表メディアの違いに加え、発表時期に一〇年のタイムラグがあるが、ここでは啓太と江口の「母」を求める感情の近さを重視して比較対象とした。
- (注八) 貝原益軒「女子に教める法」(石川松太郎『女大学集』東洋文庫302 平凡社 昭和五二年二月)
- (注九) 河盛好蔵『新訳女大学』(文体社 昭和一八年一〇月)
- (注一〇) 終戦後はカストリ雑誌などの発行により、性の解放

が叫ばれる時代になっていたが、多くの家庭では婚前交渉は避けるべきという考え方が一般的である。

【参考文献】

- 川端康成『虹いくたび』(新潮社 昭和三六年七月)
- 川端康成『川端康成全集』第一八巻(新潮社 昭和五五年三月)
- 中哲裕『源氏物語』と『虹いくたび』——川端康成の『源氏物語』体験——(『長野技術科学大学 言語・人文科学論集』昭和六二年七月)
- 小山静子『良妻賢母という規範』(勁草書房 平成三年一〇月)
- 三好行雄他編『日本現代文学事典 人名・事項篇』(明治書院 平成六年六月)
- 羽鳥徹哉・原善『川端康成全作品研究事典』(勉誠出版 平成一〇年六月)
- 三谷憲正『虹いくたび』試論——基礎的作業を中心として——(田村充正他編『川端康成の世界2 その発展』勉誠出版 平成一一年三月)
- 橋詰静子『温泉文学と観音信仰——川端康成『虹いくたび』の『銀の乳碗』論——』(『目白学園国語国文学』第一〇巻 平成一三年三月)
- 深沢晴美『川端康成「虹いくたび」論——虚空にかかる『反橋』／虚像の反復——』(『芸術至上主義文芸』第三〇巻 平成一六

年十一月)

會根博義編『文藝時評大系 昭和篇Ⅱ』第一〇卷昭和三〇年(ゆ
まに書房 平成二〇年一〇月)

木村涼子『へ主婦』の誕生 婦人雑誌と女性たちの近代』(吉川
弘文社 平成二二年九月)

千田有紀他編『ジェンダー論をつかむ』(有斐閣 平成二五年
三月)

大越愛子・倉橋耕平編『ジェンダーとセクシュアリティ——現
代社会に育つまなざし——』(昭和堂 平成二六年一月)

伊藤公雄・牟田和恵編『ジェンダーで学ぶ社会学』(世界思想
社 平成二七年一〇月)

※歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに、旧字体のものは新字体に
改めた。

—しおざき・あやか 日本文学科四年生—